

2024年7月7日 説教「地の果てにまで」

使徒の働き 1章3～11節

今朝は日本長老教会・世界宣教週間ですので、世界宣教を覚えつつ、使徒の働き1章の御言葉を学んでいきます。

1. 復活の主のお言葉 (3～5節)

①四十日の間 (3)「イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現われて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。」

十字架の受難で死なれた主イエスは、墓に葬られ、三日後によみがえられました。そして40日間、弟子や多くの人々の前にお現れになりました。その間に主は、神の国のことを語られるとともに、何回にもわたり、証拠を示され、復活の主であることを証しされました。幻想では決してないことを示されるためでした。

②父の約束を待て (4)「彼らと一しょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。『エルサレムから離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。』」

弟子たちとともにいるとき、イエスは命じられたのです。それは、エルサレムから離れず、キリストから聞いた約束を待てということでした。ヨハネの福音書14章において、イエス・キリストはご自身が去られた後、助け主がやってくることを約束なさいました。助け主というのは聖霊のことです。聖霊が来られるまで待ちなさいという大切なお言葉でした。

③聖霊のバプテスマ (5)「『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。』」

復活の主はバプテスマについて語られます。即ち、イエスの道備えのために来たバプテスマのヨハネは、ヨルダン川で水のバプテスマを授けました。キリスト御自身もヨハネからバプテスマを受けられました。しかし、今ここでは、彼らは「聖霊によるバプテスマ」を受けると、復活の主は仰ったのです。

2. 聖霊の力による世界宣教 (8節)

①いつ国の再興を (6)「そこで、彼らは、一しょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。『主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。』」

「神の国」のことと「聖霊のバプテスマ」のことを聞くと、弟子たちは、イスラエル民族のうちに神の国が再興されると理解したのです。そして、一しょに集まったときに、「この時なのですか」と尋ねたのです。弟子たちのえがいていたのは、旧約聖書に基づくもので、イスラエル民族の独立による、神の国の地上的実現でありました。

②知らなくてよい (7)「イエスは言われた。『いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。』」



主イエスは弟子たちの質問の内容についてはふれませんが、注意されたことは、いつか、どんな時かについては、弟子たちの関わることでないと言われました。そして、その時を定める権威は父なる神御自身が持つておられると宣言されました。

③地の果てにまで (8) 『しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるときあなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。』』

キリストが伝えたいのはこちらでした。もうすぐ来られる助け主である聖霊が弟子たちやクリスチャンのなかに降臨されると、彼らは力を受けるといいます。この力は人間的力ではなく、天来の大いなる力です。そしてなされることは、エルサレムから始まって、ユダヤ、サマリヤの全土、さらには地の果てまで主の証人となるということです。起きた出来事についての証し人となるということです。

3. 天に昇られた主 (9~11節)

①雲に包まれて (9) 「こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。」

復活の主は40日間の現われの間にも様々な出来事やお言葉が示されましたが、8節にあるお言葉も格別でした。そのお言葉を告げられた後に、復活のイエスは弟子たちのいる前で、上げられていきました。天に向かって上げられていきました。やがて、雲に包まれて、見えなくなられたのです。昇天されたのです。ここには、目で見えたままのことが記されていますが、有限の世界から永遠の御国に移って行かれたということです。

②白い衣を着た人 (10) 「イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。」

復活の主イエスが昇天される時に、弟子たちはその姿を見送るようにして、天を見つめていました。そこに、御使いと思われるふたりが、白い衣をまとって、弟子たちのそばに立ちました。主のご降誕の時には、マリヤ、ヨセフ、ザカリヤ、羊飼いたちに現れ、主の復活の時には墓の中でマグダラのマリヤや他の女たちの前にも現れました。

③またおいでになる (11) 「そして、こう言った。『ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになられます。』』

御使いたちは重要な出来事の時に、その意味を告げるために用いられました。ここでは、イエスの昇天の出来事に圧倒されていた弟子たちに、それと同じような有様でイエスは再臨されるということを預言したのです。つまり、局面は変わり、弟子たちはキリストの証人として、新たに歩み出していくことがうながされていたのです。

《結論》 あなたは、復活の主のなさったことや、言われたことでは、何が印象に残っていますか。また、何を信じていますか。何に疑問を持っていますか。私は、イエスの復活を信じられないマスに、「見ずに信ずる者は幸いな」と言われたお言葉。またエマオへの道に行くクレオパともう一人の弟子と共に歩いて下さった復活のキリスト。また、弟子たちの前で焼き魚をお食べくださった、よみがえりの主の事が印象強く思い出されます。

さて、復活のイエスが、弟子たちあるいは教会に向けて語られたお言葉があります。そのなかでも、二つのお言葉は重要です。その一つはガリラヤの山での大宣教命令です。「わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が授けられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、またわたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」(マタイ28:18~20)。このお言葉は世界宣教の礎となる御言葉です。

そして、もう一つは今朝の聖書箇所中のお言葉です。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」(8節)。これは、主が昇天される直前に語られたお言葉です。復活の主が最後に語られた遺言のようなお言葉です。ここには、聖霊が臨まれると、弟子たち及び教会は力を受けるとあります。力という言葉は原語でデュナミスといえます。ダイナマイトの語源です。爆発的な力です。それは、キリストの十字架の愛と復活の喜びに裏付けられた、恵みに満ち溢れた力です。この力に押し出されて、弟子たちや教会は主イエスの証人となるということです。自分を捨てて、キリストを証するということです。そして、その恵みの力は、エルサレム、ユダヤ、サマリヤの全土と進み、ついには地の果てにまで、進んでいくということです。ローマ帝国は世界帝国でした。その支配地域は広大でした。しかし、この福音はそれをはるかに越えて、地の果てにまで及ぶと預言されています。

聖霊の力は受けて証人たちは、初代教会から教会の歴史を経て、地の果てと言って良いこの国まで伝えました。また、今でもなおこの立証は教会と宣教者たちを通して継続されています。

「海外宣教報」の巻頭言でイケル・カーター宣教師(名古屋セントラル教会牧師)が証してくれています。「海外宣教師は皆、福音のために母国を離れて外国に行く時に犠牲を払います。海外宣教には多くの祝福と喜びがありますが、同時に多くの苦難と孤独の時もあります。時が経つにつれて、宣教師達は自分の祈りの手紙をまだ読んでくれる人はいるだろうか自分のために実際に祈ってくれている人はいるだろうかと思うようになります。だからこそ、自分のために祈ってくれているという手紙やメールをもらうことは、とても励みになります」。地の果てにまで福音が伝えられるために、労している宣教師のために祈りましょう。また、この教会も世界宣教を担っています。この地の民の救いのために、ますます祈っていきましょう。世界宣教を支援していきましょう。